

QOL改善に寄与した。肝硬変では肝予備能の改善および肝不全移行の遅延化が期待される。

### 13 インターフェロン，リバビリン併用療法によって譫妄状態に陥ったC型慢性肝炎の一例

青木 洋平・丸山 正樹・大越 章吾

鈴木 健司・野本 実・青柳 豊

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
分子細胞学消化器内科学分野(第三内科)

症例は58歳女性。C型慢性肝炎に対し、IFNおよびRibavirinの併用療法を行った。経過中IFNの副作用としてせん妄が出現し、IFNおよびRibavirinの投与を中止したが、せん妄、幻覚妄想などの精神症状は遷延した。これらの精神症状は、抗精神病薬の投与にて改善された。一方、C型慢性肝炎に対しては、HCV-RNAは持続陰性となり著効となった。

IFNの副作用として、うつ病や不安焦燥感、せん妄などの精神症状が報告されているが、IFN低用量投与(慢性肝炎に対する投与)においては、これらの精神症状が遷延することがしばしばある。これは、IFNの直接作用ではなく、IL-1やTNFなどの神経毒性を持つサイトカインを介した作用によるものと考えられている。よって、精神的脆弱性のあるPatientに対しIFNを投与する際は、投与中および投与後も注意深く経過観察をする必要がある。

### 14 インターフェロン治療が有効であったC型肝炎関連腎症と思われる一例

目時 亮・横田 隆司・大嶋 智子

藤原 真一・小林 由夏・飯利 孝雄

七條 公利

立川総合病院消化器内科

C型肝炎患者に膜性増殖性腎炎が起こることが知られており、HCV関連腎症といわれている。今回我々はC型慢性肝炎にネフローゼ症候群を合併しIFN投与に伴い尿蛋白が減少した一例を経

験した。症例は、58歳女性。約30年前よりHCV抗体陽性を指摘。3年前より尿潜血と尿蛋白陽性を指摘され、2年前から徐々にトランスアミナーゼの上昇を認めたためIFN治療目的にて入院となった。入院時検査成績として、TP・Albの低下と、GOT 243, GPT 276と肝酵素の上昇を認めた。また、HCV抗体が陽性でウイルス量、470KIU、ジェノタイプIIaであった。尿蛋白は一日量で5.1gであった。その他に、クリオグロブリン擬陽性と、補体価の低下を認めたためHCV関連腎症と診断し、IFN投与を開始した。IFN投与開始後よりトランスアミナーゼの改善と、尿蛋白の減少を認めた。IFN開始2週間後にはHCV-RNAは陰性化し退院となった。

C型慢性肝炎とHCV関連腎症の治療としてIFN治療が有効であった一例を経験した。HCV関連腎症の症例の蓄積により、腎機能の長期的予後も考慮した総合的治療が必要と考えられた。

### 15 IFN・Ribavirin併用療法の経験

杉山 幹也・丸山 貴広・近 幸吉

新潟県立坂町病院内科

C型慢性肝炎に対して若干例のIFN・Ribavirin併用療法を施行したので報告する。

17例に施行(投与完結8, 継続中4例, 中止5例)。Serogroup 1(以下1群)は15例, 2(以下2群)は2例。1群中HCVRNAの24週終了時陰性化率は71.4%(7例中5例)であった。

1群中完結し得た7例中3例(2例は8週でRNA陰性化, 1例は12週で陰性化)は引き続きアドバフェロンの間歇投与を8~9ヶ月継続し、RNA陰性を持続中であり、他の4例中2例は終了時にRNA陽性、別の2例は16週で陰性化した。終了後4週でRNAは再陽性化した。中止した5例の主な理由は鬱状態、高度の倦怠感、全身性皮疹であった。

貧血は全例に生じたが、そのみで治療を中止した例はなく、治療終了後速やかに前値に復した。2群は2例ともに開始4週でRNAが陰性化し以降も持続陰性である。

IFN・Ribavirin 併用療法は、従来の単独療法よりも明らかに HCVRNA 陰性化が高率である。

## 16 当院におけるインターフェロン・リバビリン併用症例の検討

瀧本 光弘・坂内 均・渡辺 俊明  
済生会三条病院消化器科

C型慢性肝炎のインターフェロン単独療法では難治とされている genotype I b・高ウイルス量群でも、インターフェロン・レボトル併用療法は、効果が期待できるとされている。2001年12月～2003年2月までの間に、当院においてインターフェロン・リバビリン併用療法を施行したC型慢性肝炎患者、25例を対象とし集計解析した。インターフェロン再投与例が9例、初回投与例16例で、HCV genotypeはI b 22例、II a 2例、II b 1例であった。治療終了後24週を経過し効果判定を行った例が9例、治療中止が8例であった。CR 5例、BR 1例、NR 3例で、中止例でも1例CRとなっていた。

当院で以前施行したイントロンA単独療法と比較し、ウイルス量と治療効果について解析した。I b高ウイルス量群では単独療法と比較し治療効果は良好であった。II a, II b高ウイルス量群でも同様であった。CR例では全例で、治療開始12週後までにHCV RNAは陰性化した。投与中止例は単独療法と比較し頻度が高かった。

## 17 IFN, リバビリン併用療法後期より悪性貧血を呈した慢性C型肝炎の1例

眞田 文博・山崎 和彦・三木 巖  
伊藤 信市・若林 博人・三留 正成\*  
上遠野武文\*

竹田総合病院消化器科  
同 血液内科\*

今回私たちはIFN, リバビリン併用療法後期に悪性貧血を呈したC型肝炎の1例を経験した。

症例は50歳の女性で、輸血歴・手術歴は無く、

弟が1型糖尿病、父が悪性貧血（胃切除歴なし）と自己免疫疾患の濃厚な家族歴を有していた。

IFN, リバビリン併用療法を導入した後、副作用と思われる軽度貧血を認めたが、減量、中止により改善していた。

6ヶ月間の治療によりHCV-RNAは検出感度以下とC型肝炎に対する治療は成功したが、終了1ヵ月後に急激なLDHの増加と汎血球減少の出現を認めた。

身体所見、血液検査、骨髄穿刺により悪性貧血と診断、治療により著明な改善を認めた。IFNは自己免疫疾患の悪化をきたすことが知られているが、悪性貧血を顕在化させた症例の報告はなく、貴重な症例と考え報告する。

## 18 インターフェロン治療後に発症したC型肝炎細胞癌の検討

大嶋 一美・夏井 正明・姉崎 一弥  
原 秀範・塚田 芳久・関根 輝夫  
小山俊太郎\*・下田 聡\*・清野 康夫\*\*  
中川 範人\*\*・齋藤 明\*\*  
若木 邦彦\*\*\*・須田 剛士\*\*\*\*

県立新発田病院内科

同 外科\*

同 放射線科\*\*

同 病理\*\*\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

消化器内科学分野\*\*\*\*

1991年8月から1999年8月までに当院にてインターフェロン（以下IFN）治療を行い、3年以上経過観察できたC型肝炎44例について検討した。治療例44例中肝細胞癌の発生は4例（9%）で、男性3例、女性1例で治療後32ヵ月から119ヵ月後に発症した。これら4例の治療効果はCRが1例、NRが3例であった。肝組織の経時的変化を見るとCR症例では治療後も線維化の残存を認めた。NRの3例中2例は肝組織の改善は見られなかったが、1例では一時線維化の改善を認めた。肝細胞癌の治療は4例中1例で内科的治療を行い、3例は外科的切除を行った。慢性肝炎の活動性がIFN治療で抑制できたことが治